

後期チャールキヤ寺院の壁面構成に関する考察 —平面構成との関連について—

A Study on the wall composition of the Later Chalukyas of Kalyani —The Comparative Analysis with spatial composition—

矢口直道
Naomichi YAGUCHI

Abstract

This study aims to clarify the characteristics of the temples built under the Later Chalukyas of Kalyani in South India, in terms of walls, compared with the concept written in Vastusastra, the traditional text of Indian Architecture, and spatial composition. The walls of Later Chalukyan temples are composed of several parts, i.e., adisthana (basement), bhatti (wall proper), tala (tires of the superstructure) and so on, from the elevation, and bhadra (central offset), karna (corner division), pratiratha (wall offset flanking bhadra) from the plan. The design of the wall not only represents of the concept written in Vastusastra, but also strongly emphasizes the symbolism of Vedic concept which implies superimposed layer. And the division of the wall is corresponding to the spatial composition of the temple.

Keywords ; Indian Architecture, Later Chalukyas, Wall Composition

はじめに

後期チャールキヤ朝は、10世紀から13世紀にかけて南インド・カルナータカ州北中部を中心に勢力を保った王朝である。タイラⅡ世が973/4年頃に興し、11世紀後半から12世紀前半のヴィクラマーディティヤⅣ世の時代に最盛期を迎え、北中部カルナータカを中心にアーンドラ地方まで支配下においた。その後、12世紀末までに、カーカティーヤ朝、ヤーダヴァ朝、ホイサラ朝によって分割された¹⁾。

本稿は後期チャールキヤ寺院の外壁面について、その構成原理と平面形との関連性を考察するものである。本稿で取り扱う寺院は、平成15年度科学研究費補助金を受けた調査に基づくものである²⁾。これらの寺院は、外壁面に複雑な装飾が施されているが、これらは水平、垂直方向に沿って秩序だって構成されている。まず、後期チャールキヤ寺院の基本的な平面構成と壁面構成を概観し、インドの建築に関する規範書であるヴァーストゥシャーストラに記された寺院の立面、平面の構成原理、さらに内部空間との関連性について考察する。

1. 寺院の基本的平面構成

寺院は、神像を安置するガルバグリハ（祠堂）その前にあるアンタラーラ（前室）壁に覆われたグーダ・マンダパ（拝殿）これに続く半屋外の入口（ムカ・マンダパ）そして主に舞踊、観劇に用いられたランガ・マンダパ（歌舞殿）巡礼者のために設けられたサバー・マンダパといった半屋外ホール等

の室で構成されている（図1）。一般的にはこれらの室が東西軸線上に一列に配置されて寺院が構成される。寺院各室の平面形は、正方形か、これを基本とし、各辺の中央部が張り出した十字形平面を呈している。これらの室のうち、ガルバグリハの周りの構造物を特に、ヴィマーナ（本殿）と呼び³⁾、拝殿空間とは区別している。本稿では、壁面の構成を考察する際に、ヴィマーナとこれに類似したグーダ・マンダパと、半屋外のムカ・マンダパ、ランガ・マンダパ・サバー・マンダパを分けて取り扱う。

2. ヴィマーナの壁面分割

ヴィマーナは、壁面で覆われた上部構造をもった構造物で、その壁面は、規則的に、水平方向、垂直方向に分割されているものと考えることができる。

2-1. ヴィマーナの水平壁面分割

ヴィマーナ外壁は、層状に積み重ねられているが（ターラー）第1層は、下からアディスターナ（基壇）ピッティ（壁）プラスタラ（エンタブラチュア）に分割されている。このターラーが数層積み上げられた上に、シカラ（頂部のドーム状屋根）が載っている（図2）。

アディスターナ（adhithana）は、ヴィマーナの最下層にある基壇で、一般的に幾つかの層状のモールディングからなる（図3）。

プラティ・カンタ（pratikantha）は、パッティ（patti）の層

状装飾が最上部にあるアディスターナの最上部にあるモールディングで、装飾要素として表面にヴァーラ・マカラの瘤のついたものが見られ、これをナクラ・パッティカー（マカラの頭の連続層）と呼ぶ。カポータ・パーリー（kapota-pali）は、円筒状のコーニスを象った基壇の蛇腹で、カポータのモチーフは、屋根を示すものとして基壇のみならず、エンタブラチュアなど寺院の様々な部位に用いられる。トリパッタ・クムダ（tripatta-kumuda）は、上下横、三面が平面状に切り取られたモールディングで、マドゥヤパッタと呼ばれる彫像の描かれたパネルが、この前面に置かれることがある。パドマ（蓮弁）padma 蓮の花弁を象ったモールディングでジャガティのすぐ上に用いられる。ジャガティ（jagati）寺院の基壇の最下層に置かれるモールディングであるが、この語は寺院全体が載るプラットフォームの名称としても用いられる。ウパーナ（upana）は、平坦なモールディングで、ジャガティの下に用いられることがある。

このアディスターナは、最下層からパドマまでの下部と、トリパッタ・クムダに相当する中間部、カポータ・パーリー以上の上部に分けることができる。

アディスターナの上にたつ壁そのものの部位をビッティと呼ぶ。細長いピラスターが基調となって垂直に分割され、突起部に寺院の上部構造のレリーフを戴くニッチが設けられて神像が配置される。ピラスターは柱礎、柱身、柱頭の各部位に分けて装飾されており、柱頭の上にはエンタブラチュアが置かれる。

ブラスタラ（prastara）は、ビッティの上にはエンタブラチュアで、後述の垂直に分割されたそれぞれの部位に異なるデザインの屋根が載る。

ターラーは、階または上部構造の層を示す語で、アディスターナからブラスタラまでが第1ターラーとなる。この上に、寸法を減じながら、ビッティの柱頭からブラスタラの部位を繰り返し層状に積み重ねて第2ターラー、第3ターラーと積み上げて上部構造を構成している。第2、第3ターラーを上部構造と呼ぶことが多い。この上部に積み上げられたターラーの数によってドヴィターラ（2層）またはトリターラ（3層）という呼称が用いられ、ヴィマーナの規模を表している。

シカラは、ドラヴィダ様式では、ヴィマーナの頂部にあるドーム状の屋根を意味し、平面形によってブラフマツチャンダ（正方形）、ヴィシュヌツチャンダ（八角形）、ルドラツチャンダ（円形）等の呼称がある^{vii}。マーナサーラには、これと正方形のシカラを、最も聖なるものとして、ドラヴィダ、六角形または八角形のシカラをナーガラ、円形シカラをヴェーサラと呼んでいる^{viii}。

2-2. ヴィマーナの垂直壁面分割

正方形平面のガルバグリーハの周りにはその形にしたがって外壁が設けられ、四面の外壁の中央部、隅部などが張り出した凹凸のある外壁面を構成している。中央部で2段3段に張り出し

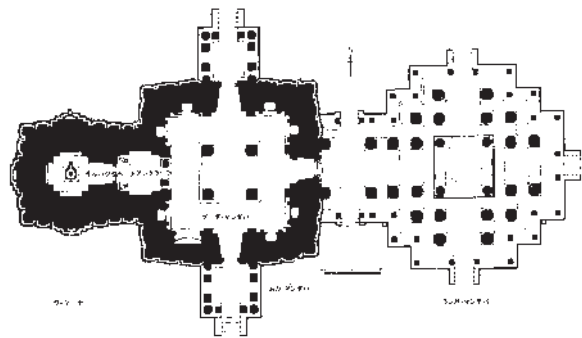


図1 マハーデーヴァ寺院、イットギー、平面図^{iv}

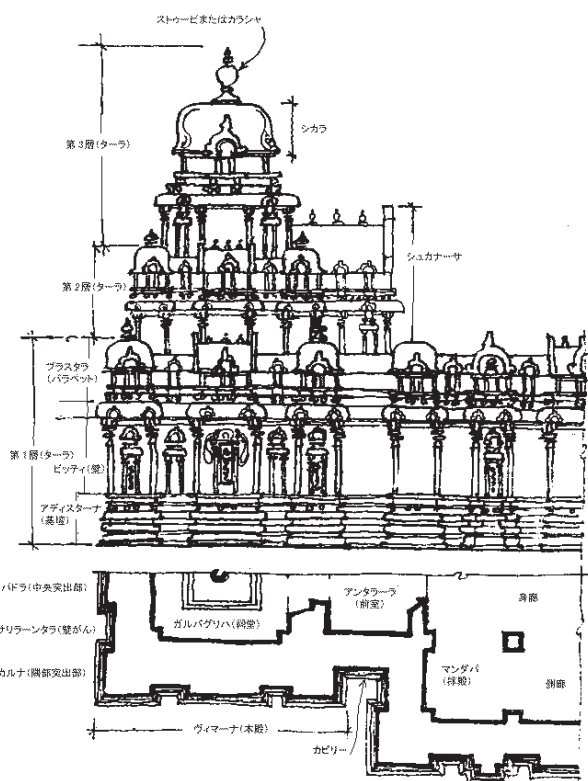


図2 ヴィマーナの水平、垂直分割^v

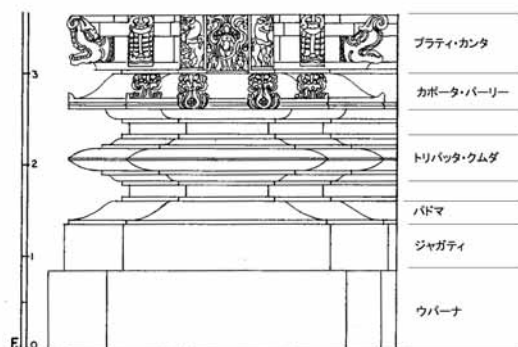


図3 マハーデーヴァ寺院、アディスターナ^{vi}

た突起をパドラ (Bhadra)、隅部の突起をカルナ (Karna)、このパドラとカルナの間に設けられることのある突起をプラティラタ (Pratiratha) と呼ぶ。これらの突起部の端には細長いピラスターが付けられ、それぞれの突起部の中間にあるサリランタラ (Salilantala) と呼ばれる壁龕状の部位によって分離されている¹⁸。

これらの突起は前述の水平壁面分割各部位を通して保持され、基壇からシカラ直下に至るまで層状に繰り返し用いられる。

前述の水平に分割された部位のうち、この垂直壁面分割にしたがって異なる装飾が施されるのは、ピッティとブラスタラである。ピッティは壁面の張り出している境界に細長いピラスターの柱身と柱頭がレリーフされる。さらにこのピラスターの内側にそれぞれの突起部に異なったレリーフが置かれている。パドラには寺院の上部構造を冠し、軒の飾りのついたニッチが置かれ、神像が安置される。カルナには二本のピラスターで寺院の上部構造のレリーフを戴く偽龕 (false niche) が設けられる。プラティラタには、パドラ、カルナとは異なりピラスターが用いられることが多い。

サリランタラにはクータスタンバ (kuta-stambha) が設けられる。これは一本のピラスターの上に寺院の上部構造のレリーフが置かれたものであるが、上部構造のモチーフには、ナーガラ、ドラヴィダ、ヴェーサラの各様式が用いられている¹⁹。

また、ブラスタラには垂直分割にしたがって屋根形が置かれる。パドラには、円筒ヴォールト状の屋根をモチーフにしたシャーラー (sala) を平置きにして置く。カルナにはドーム屋根をモチーフにしたクータ (kuta) が置かれ、プラティラタには、筆を意味し、ナーシー (馬蹄形妻飾り) を前面に持つパンジャラ (panjara) が置かれる。

さて、ヴィマーナとマンダバの間にあって、アンタラーラの外壁にほぼ相当する外壁面をカピリーと呼ばれるが、この外壁は、ガルバグリハとほぼ中心を同じくするヴィマーナと、マンダバの外壁の接合部にあたり、壁の見付の幅が短くアンタラーラの室の形がそのまま外部へは表れていない。正方形平面のヴィマーナ、マンダバの形を際立たせるために設けられた緩衝壁と捉えることができよう。

またこれは、アンタラーラがガルバグリハの前室的機能を持つと同時に、ガルバグリハとマンダバの緩衝空間として機能していることとも関連しているものと考えられる。

カピリーには、その中央にピラスター、偽龕などが設けられており、この両側の壁龕状の部位にマカラトローナがあってアンタラーラの窓となっている場合がある。

3. ゲーダ・マンダバの壁面分割

ゲーダ・マンダバは基本的にはヴィマーナと同様の方法によって垂直に分割されている。すなわち、壁面中央にパドラが

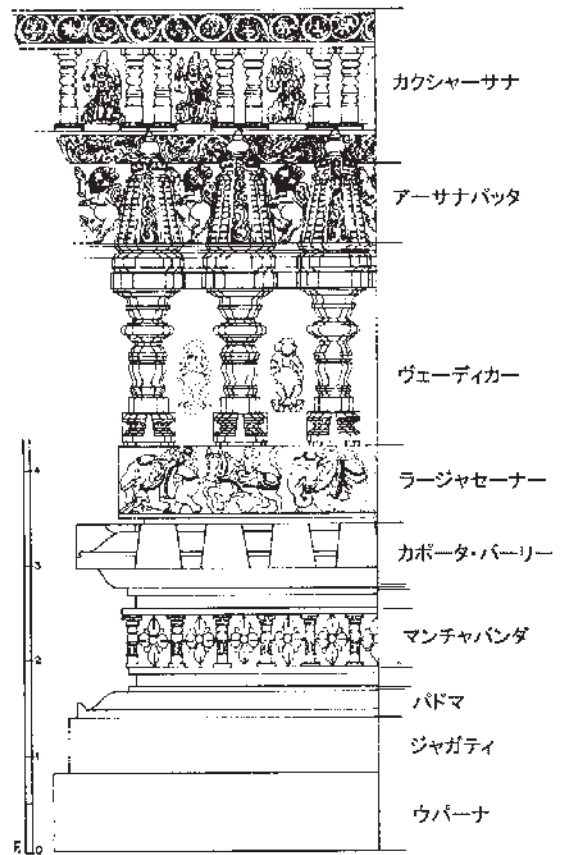


図4 チャンドラマウリーシュヴァラ寺院、ウヌカル、アディスターナ立面図²⁰

おかれ、隅部にカルナの突起が配置される。その中間に規模に合わせてプラティラタが繰り返されるのである。また水平分割も、ヴィマーナと同様にアディスターナの上にピッティが載り、その上のブラスタラまでで構成される第1ターラーが、続いている。

4. ムカ・マンダバ、ランガ・マンダバ、サバー・マンダバの壁面分割

ムカ・マンダバは4本の柱またはピラスターで囲われた小空間で、ランガ・マンダバ、サバー・マンダバは正方形平面の辺が大きく張り出した十字形平面を呈している。これらの外壁には、垂直分割されておらず、平坦である。ただし、半屋外空間のムカ・マンダバ、ランガ・マンダバ、サバー・マンダバの壁面は、腰壁状のアディスターナの上には、壁がなく短柱 (dwarf pillar) が建ち、さらにその上にS字曲線の断面を持つ軒、さらにヴィマーナから続くブラスタラが載っており、これらが層をなしていると考えられる。

マンダバのアディスターナは、ヴィマーナとは異なる要素で構成されている。カクシャーサナ (kaksasana) は、アディスターナの最上部にあって、短柱の建つ腰壁の手すり、もしくは

この部分を観客席と見た場合の背もたれ状のものとみなされる部位である。外側には両側をピラスターにはさまれた神像のレリーフが並ぶ。アーサナパッタ (asanapatta) は、座席の座部にあたる部分で、寺院の上部構造のレリーフが施される。ヴェーディカー (vedika) は、手すり状のピラスターのついた羽目板で、ピラスターのレリーフの間にガンダルヴァが描かれる。このピラスターのアーサナパッタに描かれた寺院の上部構造のレリーフがクータスタンパを形成している。カポータ・パーリーの下には、レリーフを持ったモールディングが置かれる。上に置かれるラージャセナー (rajasena) には、象をモチーフとしたモールディングであるガジャパッタ (gajapatta) が描かれることが多い。下に置かれるマンチャバンダ (mancabandha) には、ダイヤモンド形の花びらがピラスターの間にレリーフされている。この下には、ヴィマーナと同じモールディングが層状に積み重ねられる。

5. 考察

以上で概観した後期チャールキヤ寺院の壁面分割について、インド中世の規範書であるヴァーストゥシャーストラの記述、さらに内部空間との関連性について考察したい。

5-1. 立面の構成原理

ヴィマーナを構成する基本的な概念として、クラムリッシュは土と石と木の材料に着目し、以下の三点に集約している^{xii}。ひとつ目の土に象徴される概念は、ヴェーダの祭壇に起源のあるブーミの積み重ねである。聖なる土を原料としたレンガを積み上げて作った祭壇の記憶が、層状に積み重ねられた基壇や上部構造の構成に表れていると考えている。次に、石に象徴される概念として、ガルバグリハに顕著に表れている陸屋根の構造を挙げている。ドルメン、メンヒル等の巨石墓は、死者の記録として必要不可欠なのではなく、それによって記憶される土地の重要性を記念するものであるという観点に立ち、板状の大きな石による記憶は、立方体状のガルバグリハの内壁面と共通するものであると考えている。最後に、木に象徴される概念は、筍に代表される生命力である。四本の竹や小枝を正方形平面の四隅に固定し、これらの幹を湾曲させて、頂部を藤蔓で結んで作った骨組に、バナナの葉、ヤシの葉で屋根を葺いてできた小屋が、北インドのヒンドゥー寺院に多く見られるナーガラ様式の原型であると推論している。

この概念のうち、一番目の層状に積み上げられるという概念が後期チャールキヤ寺院では強調されている。すなわち、層毎にそれぞれのデザインが反復されているのである。顕著に見られる点として、ヴェーダと同じアディスターナの層状の積み重ねと、ターラーにピッティ上部のピラスターの柱頭からブラスタラまでが反復されている点が挙げられる。

5-2. 平面の構成原理

ヴィマーナの平面形は、ヴァーストゥブルシャマンダラに基いて構成されているものと考えられている^{xiii}。ヴァーストゥブルシャマンダラは、正方形を64または81に分割し、その中央部は、宇宙の最高原理であるブラフマンを象徴するブラフマスターナで、創造神ブラフマーが座す。その周りには、時間を象徴する12のアディトヤが配置され、最も外側の周縁部に四方位神 (ローカパーラ)、八方位神 (アシュタディクパーラ) などの方位神が配置される。このヴァーストゥブルシャマンダラとヴィマーナとを重ね合わせて考えてみると、ブラフマスターナがガルバグリハに、周縁部がヴィマーナ外壁にほぼ相当する^{xiv}。ヴィマーナ外壁のバドラとカルナは、ヴァーストゥブルシャマンダラのローカパーラ、アシュタディクパーラが配置される場所と一致するものと考えられることができる^{xv}。つまり、方位神の配置される位置が張り出していて、宇宙の中心と同一視されるブラフマスターナの光輝が四方八方に敷衍していく様子を具現化しているものと考えられるのである。

5-3. 屋内空間と壁面分割の相関

屋内空間に限ってみると、壁構造に基いたガルバグリハを中心とした構造物と、楕円構造に基いたマンダパを中心とした構造物が対照的に配置されるものと考えられることができる^{xvi}。

内部の室の位置と外部の壁面の凹凸は必ずしも一致しているわけではない。平面的に見たとき、ガルバグリハとヴィマーナ、グーダ・マンダパの内外壁はその中心をほぼ同じくすると考えることができる。ヴィマーナは正方形平面の中央部、すみ部を張り出してできる平面分割に則ってアディスターナからシカラまで閉じた形で、積み上げられている。グーダ・マンダパは、ヴィマーナと同様の壁面分割がなされている。ヴィマーナとマンダパの境界にあたるアンタラーラの壁面、カピリーには他と異なるデザインのピラスターが設けられていて、両者の境界を示しているものと捉えることができる (ラクシュメーシュヴァラのソーメーシュヴァラ寺院 (図7)、アンニゲリーのアムリテーシュヴァラ寺院 (図8))。平面的に見るとマンダパとガルバグリハの間のアンタラーラは、二つの中心を同じくする構造物の厚い壁の中に作られている空間のようにさえ見える。

ムカ・マンダパは、平面形が正方形でない寺院も含めて、グーダ・マンダパの壁についたピラスターと、前面の二本の柱で矩形平面を成している。ムカ・マンダパは4本の柱で構成された矩形平面の構造物というよりは、ピラスターの分だけグーダ・マンダパに入り込んでいるように見える。この両者の壁面の境界は、アディスターナの高さが異なるなど、壁面の垂直分割が異なる二つの壁面が接しており、連続の仕方が不連続である。これはムカ・マンダパのみではなく、半屋外空間である、ランガ・マンダパ、サバー・マンダパにも共通する。

アディスターナを見ると、ウパーナからある層までアディス

ターナが連続しており、その上から壁で囲われたグーダ・マンダバと、短柱で支えられたムカ・マンダバの差異が表現されているものと理解できる。例えば、イッタギーのマハーデーヴァ寺院では、カポータ・パーリーまでが同じ層で構成されているが^{xvii}、これより上部のデザインが異なる(図6)。ウヌカルのチャンドラマウリーシュヴァラ寺院では、パドマまでは同じデザインで、これ以上の層では各層のデザイン及び高さが異なっている(図7)。ダンバルのドードダバサッパ寺院では、ブラティ・カンタ(ナクラ・パッティカー)までが同じそうで構成されている(図8)。この境界での壁面上部を見ると、ムカ・マンダバの軒が、グーダ・マンダバのプラスタラにあるパンジャーラの分割を無視してつながっており、不連続に連結している感をぬぐえない(ラックンディのカーシーヴィシュヴェーシュヴァラ寺院、図11)。

ヴィマーナは、神像を安置するガルバグリハをその中心とし、垂直、水平の壁面分割ともそれ自体の分割方法によって完結している。これは寺院のもっとも神聖で、根本的な部位を完全に表現していると考えることができる。ヴィマーナと連続するアンタラーラの外壁カピリーには、ヴィマーナとマンダバを分離するピラスターが配置され、同じ壁面の構成を持つマンダバと分離させている。一方、マンダバ相互の連続性は、壁面の垂直分割が異なるために不連続となっている。

おわりに

様々な建築モチーフと彫像で装飾された後期チャールキヤ寺院の壁面は、規範書に示された考え方で計画され、異なる用途の室を内包している。寺院を構成する室は、ガルバグリハとこれ以外のマンダバに大別して考えることができる。ヴィマーナとマンダバの境界、マンダバ相互の境界をみると、観念的には前者がより重要であるが、構造的には後者にほうが顕著である。そして、これは必ずしも内部の室で割り切れるものではなく、前者の境界にあるのがカピリーのピラスターで、後者がマンダバ間の層の不連続であるということが出来る。さらに前者を神聖な空間、後者を世俗的な空間と捕らえると、この両者の間にあって、曖昧さを残しているのがグーダ・マンダバであり、まさに世俗の人々が神に向かって礼拝する行為を行う空間なのである。

脚注

- i K. A. Nilakanta Sastri, *A History of South India, from Prehistoric Times to the Fall of Vijayanagar*, Madras, 1955, pp.173–206.
- ii 研究課題「南インド宗教建築の左右対称性に関する研究」(若手研究B)15760482。なお調査した寺院の一覧を表1に挙げる。

- iii 北インド建築では、このガルバグリハの周りの構造物をブラーサーダと呼ぶが、南インドでは一般的にヴィマーナの呼称を用いる。
- iv M. A. Dhaky, *Encyclopaedia of Indian Temple Architecture, South India Upper Dravidadesa, Later Phase*, 1996, (以下EITA) pp.198–199, fig.127をもとに筆者作成、以下同様。
- v Adam Hardy, *Indian Temple Architecture, Form and Transformation*, 1995, p.406, fig.9.をもとに筆者作成。
- vi EITA, p.196, fig.126.
- vii EITA, p.585.
- viii Stella Kramrisch, *The Hindu Temple*, 1946, pp. 286–295.これら三つの用語は、ドラヴィダが南型、ナーガラが北型、ヴェーサラが中間型というように、インドの地域的寺院建築の特徴を集約して用いられているが、原意は、南インドの規範書、シルバトラに示される通り、ドラヴィダ寺院のシカラの平面形である。
- ix ダンバルのドードダバサッパ寺院は、ヴィマーナ、グーダマンダバともこの正方形の辺の中央部と隅部を突起させる分割法には則っていない。この寺院は、正方形の中心を固定し、15度ずつ6回回転してできる頂点が24の図形をもとにヴィマーナが、11.25度ずつ8回回転してできる頂点が32の図形をもとにグーダマンダバが構成されている。またサヴァディのトリプルシャ寺院のヴィマーナで用いられている分割方法は、カルナータカ州南部のホイサラ寺院で頂点が16の図形をもとに構成される星型平面に非常によく似ている。ホイサラ寺院の場合でもダンバルの寺院のように、マンダバにこのような正方形を回転してできる図形をもとに構成される壁面を持つ寺院はない。
- x ひとつの寺院に、ひとつの様式のモチーフが用いられている場合、三つの様式が混合している場合があって、一概にモチーフの配置の位置関係を論ずるわけにはいかない。しかし、11世紀のカルナータカでは既に三つの様式が知られており、その構築方法も確立していたこと、そしてそれらを時と場合によって使い分けていたであろうことは推論できる。
- xi EITA, p.158, fig.100.
- xii Kramrish, *op. cit.*, pp.145–160
- xiii Kramrish, *ibid.*, pp.67–97.
- xiv これは中世カルナータカ地方に一般的な、ブラダクシナ・バタ(繞道)のないニールンダ型寺院に当てはめたもので、ブラダクシナ・バタをモツサランダラ型寺院には当てはまらない。
- xv バドラ、カルナに安置される神像は必ずしもアシュタディクパーラとは一致しない。特にバドラに設けられたニッチには、ガルバグリハに祀られた主神像と関連した彫像が祀

られることが多い。ヴァーストゥプルシャマンダラとの関連についてはさらに考察する必要があり、稿を改めて考察したい。

xvi 拙稿「後期チャールキヤ寺院の平面構成—ホイサラ寺院との比較を通じた考察—」岐阜市立女子短期大学研究紀要第51輯 pp.195-206.

xvii この寺院の場合、写真左側にあるムカ・マンダバのカクシャーサナが崩壊している。

(提出期日 平成15年12月10日)



図5 マハーデーヴァ寺院西側外観（筆者撮影、以下同様）



図6 マハーデーヴァ寺院、南ムカ・マンダバ東面



図7 チャンドラマウリーシュヴァラ寺院、ウヌカル、東ムカ・マンダバ北面



図8 ドーダバサッパ寺院、ダンバル、南ムカ・マンガパ西面



図10 アムリテシュヴァラ寺院、アンニゲーリ、カビリー北面



図9 ソーメーシュヴァラ寺院、ラクシュメーシュヴァラ、カビリー南面



図11 カーシーヴィシュヴェーシュヴァラ寺院、ラックンディ、シヴァ寺院東ムカ・マンガパ北面

後期チャールキヤ寺院の壁面構成に関する考察

表1 対象寺院一覧

所在地名	寺院名	建立年代	出典
アイホーレ	チャランティ・マタ	c .1119A.D.	EITA p .202 fig .130
アバルール	バサベシュヴァラ	1090-1100A.D.	EITA pp .151-153 fig .98 .
アマラゴール	バナシャンカリ	1119A.D.	EITA p .211-212 Fig .137
アンニゲーリ	アムリテシュヴァラ	1050-60A.D.	EITA pp .110-114 fig .77 .
イッタギー	寺院 no 3	1112A.D.	EITA pp 200-201 Fig .128 .
イッタギー	マハーデーヴァ	1112A.D.	EITA pp .195-200 fig .127 Cousins pp .100-102 pl .101-107
ウヌカル	チャンドラマウリシュヴァラ	1080-90A.D.	EITA pp .155-160 fig .101 Cousins p .116-117 pl .116-122
ガダグ	サラスヴァティ	12世紀初	EITA pp .181-184 fig .118 Cousins p .110-112 pl .116-122
ガダグ	ソーメシュヴァラ	1125-1150A.D.	EITA pp .213-214 . , Cousins p .112-113 pl .116-122
ガダグ	トリクテシュヴァラ	1025-1050A.D.	EITA pp .106-110 fig .72 ,74 ,75 Cousins p .109 pl .116-122
ガダグ	ラーマリンゲーシュヴァラ	A.D .1100頃	EITA pp .149-151 fig .97 .
クッカヌール	カッレシュヴァラ	11世紀初	EITA pp 39-42 Cousins p .75-76 pl .110 .
クッパガッデー	ラーメシュヴァラ	13世紀初	EITA p .249 fig .154 pls .726-732
クッパトゥール	カイトヴェーシュヴァラ	1231A.D.	EITA p .162-164 fig .103
クルヴァッティ	マッリカルジュナ	1070-72A.D.	EITA pp .142-144 Cousins p .103 Rea p .21-24 pl .56-68 ,
サヴァディ	トリプルシャ	1050-60A.D.	EITA pp .114-116 fig .77 .
スーディ	ジョードウ・カラシャダ・グディ	1060A.D.	EITA pp .50-53 fig .37 .
スーディ	マッリカルジュナ	1020年代	EITA pp .43-48 fig .34 .
ソーギ	カッレシュヴァラ	1030A.D.	EITA pp .147-149 fig .148 .
ダンバル	ドーダ・バサッパ	12世紀初	EITA pp .191-195 fig .125 Cousins pp .114-115 pl .116-122
ナードウ・カラシ	マッリカルジュナ	13世紀初	EITA p .288 fig .165 pls .806-813
ナードウ・カラシ	ラーメシュヴァラ	1219A.D.	EITA p .288 fig .164 pls .803-805
ニラグンダ	ピーメシュヴァラ		EITA fig .212 pls.
バーガリ	カッレシュヴァラ		EITA fig., pls.
ハヴェリ	シッデーシュヴァラ	1070-1100A.D.	EITA pp .135-138 fig .87 Cousins p .85-87 pl .124-133
バリガンベ	ケーダレシュヴァラ	1168A.D.	EITA pp .160-162 fig .102
バナヴァシ	マドゥケーシュヴァラ		Cousins pp .112-113 pl.CXX
ハリハール	ハリハレシュヴァラ	1268A.D.	EITA pp .164-166 fig .104 pls .464-466
バンカーブラ	アルヴァットゥカンバラ	1091-1138A.D.	EITA pp .154-155 Fig .99 Cousins pp .94-96 pls .89-96
ヒレーハダガッリ	カッレシュヴァラ	1057A.D.	EITA pp .166-168 fig .105 , Rea
フーヴィナハダガッリ	カッレシュヴァラ	1071A.D.	EITA pp .140-141 fig .89 Rea pp .25-27 .
フーリ	アングケーシュヴァラ	1060年代	EITA pp .116-118 fig .80 .
フーリ	タラケーシュヴァラ	1080年代	EITA p .145 Fig .92
フーリ	パンチャリンゲーシュヴァラ	12世紀初	EITA p .209-211 Fig .135 .
フーリ	マダネシュヴァラ	c .1100A.D.	EITA p .191 fig .123
ベーヴール	ソーメシュヴァラ	1050年代	EITA pp .66-67 fig .49 .
ベーヴール	ラーメシュヴァラ	1055-60A.D.	EITA pp .65-66 fig .47 .
マーガラー	ヴェヌゴーパー	1116A.D.	EITA pp .177-179 fig .116 pls .509-517
ラクシュメシュヴァラ	アーナンタナータ	12世紀初	EITA p .177 fig .115 .
ラクシュメシュヴァラ	シャンカ・バサディ	11世紀末	EITA pp .175-177 fig .113 .
ラクシュメシュヴァラ	ソーメシュヴァラ	11世紀	EITA p .168-173 fig .107 .
ラクシュメシュヴァラ	ラクシュミリンゲーシュヴァラ	11世紀	EITA p .173 fig .110 .
ラックンディ	ヴィルパークシャ	1000-1100A.D.	EITA pp .88-89 fig .61 .
ラックンディ	カーシヴィシュヴェーシュヴァラ	1087A.D.	EITA pp .95-100 fig .66 Cousins p .79-82 pl .112
ラックンディ	グレート・ジャイナ	1172A.D.	EITA pp .89-92 fig .63 Cousins p .77-79 pl .112
ラックンディ	クンベシュヴァラ	1025-1050A.D.	EITA p .100-102 fig .68 Hardy
ラックンディ	シッダラーメシュヴァラ	1000-1025A.D.	EITA p .87 fig .59 .
ラックンディ	ナーガナータ	1060-70A.D.	EITA pp .120-122 fig .85 .
ラックンディ	ナンネシュヴァラ	1020A.D.	EITA pp .92-94 fig .64 Cousins p .82 pl .112
ラックンディ	マニケーシュヴァラ	1050年代	EITA p .102 fig .69 Hardy
ローン	アーナンタ・シャーイー・グディ	11世紀初	EITA pp .36-37 fig .24 .
ローン	イーシュヴァラ・グディ	975-1000A.D.	EITA p .19 fig .8 .
ローン	カル・グディ	975-1000A.D.	EITA p .20 fig .9 .
ローン	ローカナータ	975-1000A.D.	EITA p .15 fig .4